北海道の住宅技術のレベルの高さを解説した寒地未来生活環境研究所の福島副所長

寒地未来生活環境研究所副所長講演

「高気密で快適、健やかに」

道内の住宅技術解説

健やかな暮らしとは何かを考える、北海道科学大学(札幌市)の寒地未来生活環境研究所のキャラバン企画「健やかな住まいの作り方」が、室蘭市八丁平の住まいのウチイケ研修センターで開かれ、高性能住宅による快適で健康な暮らしについて専門家が講演した。

同研究所は、積雪寒冷地の持続可能な住環境構築に向けた技術開発や快適な生活環境を支援、向上させる目的で、人や医療、機械、情報、建築など各分野の技術を取り入れた研究開発に力を入れるほか、学外の企業や機関と連携し応用研究、実証事業に取り組んでいる。

キャラバンは同研究所の研究活動を知ってもらう機会として実施。室蘭には同大学工学部建築学科教授で、同研究所の福島明副所長が「ここまできた北海道の住宅技術」と題して講演した。

福島副所長は、30年前と今の道内の住宅技術について「見た目はさほど変わっていないが、中身はまったくの別物」と指摘。日本の住宅はかつて家全体が空気が通りやすい構造だったが、30年前から欧州などで常識だった気密性に対する関心が高まり、高気密、高断熱をうたった「北方型住宅」が始まったという。

道内では1990年代以降、北方型住宅が普及し気密性や断熱性の高い住宅が標準となった。その結果、気密性は「建築業者の技術を測るバロメーター」になり「断熱性能が高まり暖房費節約だけでなく、快適性や耐久性が向上し、健康増進や住宅価値の向上にもつながった。昨年のブラックアウトも、高性能住宅ならカセットコンロで鍋を作ればその熱で暖がとれる」と道内工務店の高い住宅技術に太鼓判を押した。

（菅原啓）